

Tohoku Fukushi University Library News 39

りんごのたな
でぎました。

としよかんぽう 39

大学の 図書館に思う

教育学部 教育学科

教授 星山幸男

図書館がいろいろな役割を担っていることは誰でも知っていると思いますが、大学の図書館はさらに違った面をたくさん持っています。私も学生のころから大学院生を経て、教員になってからも図書館にお世話になり、50年になります。学生時代はレポートや卒論の資料を探して、大学院生時代は主に専門分野の先行研究を見つけ出すために、教員になってからも論文執筆や授業で使う資料・文献探しなどで利用し、新しい発見が数多くありました。専門的な文献・資料、研究・調査の成果報告などは、大学図書館にしかないものの一例です。

そして大学の図書館の魅力の一つは、今では手に入らなくなった貴重な本や資料に出会えることです。皆さんに紹介したい本をあげれば、たとえば無着成恭編『山びこ学校』（青銅社、1951年）があります。山形県旧山元村（現上山市）の山間の中学校で取り組まれた教育は、子どもたちに生活の足元を見つめさせた実践であり、教育の原点がそこにあります。また、太田祖電・他著『沢内村奮戦記』（あけび書房、1983年）は、1950年代～60年代に医療・福祉・社会教育の協働・連携によって生み出された素晴らしい生命を守る実践が生き生きと伝わってきます。今求められている地域ネットワークづくりの原点がここに見出せます。どちらも何十年も前の話で、現代には合わないかもしれません。しかし、いずれも私にとってはその後の研究・教育の基盤を形づけてくれたものです。学生の皆さんにもぜひこのような古典的といえる名著を図書館で手に取ってほしいと思います。ここに例としてあげたものに限らず、少し時間が経っていても多くのことを伝えてくれる本や資料が図書館にはたくさんあり、皆さんとの出会いを待っています。

ところで今公共図書館では、市民と図書館の支え合う関係が注目されています(たとえば、青柳英治編著『ささえあう図書館』勉誠出版、2016)。その背景には、財政の苦しいことがあり、運用上どうしようもない部分もあります。しかしこの状況乗り越えていくために、新しい形の図書館を作っていくことが模索されています。図書館が市民を支え、市民が図書館を支えていくという形です。今の公共図書館には、静かな学びの空間だけでなく、みんなでいろいろ議論し交流を作れる空間も求められています。くつろぎの場・ホッとできる場・心を解き放ち自分でいられる場への期待もあります。図書館が共生のベースになっているといえます。共生の時代といわれてかなりの時間が経過していますが、これは福祉の面に限ったことではありません。

北海道のある小学校では、職員の朝の打ち合わせに子どもたちが出席し、先生方を相手に提案をすることが認められています。「紙飛行機とばし大会」をしたいので、時間が欲しいという希望が通ったりしています(喜多明人著『子どもの権利』エイデル研究所、2015)。こうした能動的な参加活動を通して子どもたちは自己肯定感を取り戻し、主体性を育んでいます。教育を通して大人と子どもが支えあう共生の一つといえます。

予算が厳しいことは公共図書館も大学図書館も同じです。本学の図書館の建て替えについて、大学に要望し協議を重ねた経験があります。しかし未だに新館は実現していません。この状況乗り越えて新しい図書館を作っていくことを、私は学生に期待しています。学生が職員と協働して支えあい、図書館を育ててほしいと強く思います。学生が図書館で生き生きと過ごしていれば、その大学はきっと伸び伸びと過ごせるところになっています。これまでの他の大学の図書館を数多く見てきて、確信を持ってました。

「図書館は大学の顔」です。それは立派な建物だけのことではありません。図書館に行きかう学生の表情を見ると、その大学の様子が見えてきます。ここに新しい共生があると思います。大学の図書館の魅力を活用し、真の意味での共生を育ててほしいと願っています。

余研
瀝究

臭いの感性史ーケガレと嗅覚

A History of Sensitivity to Smell: Defilement and Olfaction

図書館長 きたいとしお 鍛代敏雄

40年ほど前にニューヨークを訪れた知人は、現地ガイドから、臭気を感じる街路は危険だから絶対に立ち入ってはいけない、と警告されたそうだ。かつて、フランス社会史・アナル学派を代表する歴史家アラン・コルバンが述べた「嗅覚的警戒心」(『においの歴史』山田登世子・鹿島茂共訳、藤原書店、1990年、37頁)といえるだろう。コルバンは死の腐敗臭にかかわって、感性の歴史を説いた。最近読んだA・S・バーウィッチの『においが心を動かすーヒトは嗅覚の動物である』(大田直子訳、河出書房新社、2021年)も、洋の東西を超えて、刺激的で興味深い著作である。たとえば〈第1章 鼻の歴史〉「中世の宇宙論」の項(27~28頁)。「においは、物事の真の本質をさらけ出す道徳的特性としての役目を果たした。」「快いにおいと美德を、不快なおいと悪徳を対比させている。」「腐った死体の悪臭がたなびく代わりに、聖者の遺体や墓は、蜂蜜やかぐわしい花とハーブのような快い甘美な芳香を放つ」「神聖なおい」と書かれている。すなわち、香気(芳香)と臭気(悪臭)、聖人と俗人、道徳と不道徳(罪)、それぞれの対比の基準となる「におい」にたいする嗅覚が、人間の心性と行動を規定する、と論じている。著者は認知科学者で、歴史学者ではない。過去の〈鼻の歴史〉に関しては、歴史学・生理学・心理学・神経科学などを包括して、主に欧米の研究史が丁寧にまとめられている。筆者は長年、日本中世の身分論の観点から「穢」(エ・ケガレ)の問題を歴史的に考えてきた。なかでも、ケガレ(正確には穢気に触れること=触穢)を認知する嗅覚は、感性史および社会史にとっても、重要な課題と見なされる。

そこで、収集した史料を少し紹介しながら、ケガレと嗅覚をめぐる構造について簡約に提言してみたいとおもう。まずは『古事記』の「黄泉の国」神話を見よう。亡くなったイザナミのあとを追いかけて黄泉の国へ行ったイザナギ。蛆がわき十種の雷がまとわ

りついた女神を見たイザナギは、恐ろしくなって逃げ帰ってしまう。「醜め醜めき穢き国」に入った我が身は、心身ともに「禊ぎ祓へ」をおこなわなければならない。穢気に触れた衣を投げ捨てて、川瀬の真中に下りていき、「污垢」を洗い清めた。穢は罪を招き寄せ、イザナギの禍となるからだ。すると、左目(左方上位)を洗って天照大神(日の神)、右目を洗うと月読命(月の神)、鼻を洗って建速須佐男命(嵐の神)の神たちが創造された。この神話の解釈はいろいろとなされている。とくにスサノオについては、性差に着目して男のシンボルとしての鼻を誇張する考え方もある。しかし、私が注視したい点は、臭気と穢気と触穢の関係性にある。イザナミの死穢に触れたイザナギは、「醜め」とあるように、その醜さを見た。蛆がわくほどの死臭を嗅いだはずだ。イザナギは触穢の体を洗って、十神を生み落としたが、最後の三神が「三柱の貴子」(三貴子)という特別の神だ。のちに天津罪を犯すスサノオが鼻から誕生した点を強調しておきたい。『古事記』が撰録された8世紀初頭、『続日本紀』慶雲3年(706)3月14日の詔には「京城(藤原京)の内外多く穢臭あり」と見える。また平城京への遷都後、同書神亀2年(725)7月20日の詔では、「神を敬い仏を尊ぶことは、清浄を先となし」「諸国神祇社内に多く穢臭」のあることを戒め、敬神の礼を尽くすために、神社の「清掃」、寺院の「掃浄」を命じた。やはり「穢臭」の清浄を重視していた点は疑いない。

ついで、平安京の公家社会の「穢」にかかわる慣行と法秩序を探ろう。首都京都における戦乱や災害などで、「世間穢気充満」とか、「天下穢」といわれるような状況がおけると、政事がストップし(廃朝)、朝廷の祭礼が停止、または延期されるようなことがたびたびおこった。「穢気」とあるとおり、平安王朝の貴族社会では「穢」が空気に乗じて「展転」(伝染)すると、感染病とまったく同じように観念化されていた。いわゆる草庵の随筆、鴨長明『方丈記』には、養和年間(1181~2)の春夏の旱魃、秋の大風・洪水といった自然災害が書かれている。五穀の実りもほとんどなく、疫病が流行し病死者も数え切れない。洛中では4万人の死者が出たと憶測されている。『方丈記』は続けて「道のほとりに飢え死ぬ物のたぐい、数も知らず」「くさきか世界に満て」と、筆舌につくしがたい末法のごとき現世が描写されている。長明の心中では、末法的世界観と触穢観とが結ばれていたようだ。とくに留意すべきは「臭香世界」という、多くの死体の腐臭によって、死の穢気が充満する、触穢の世間を語ったところだ。

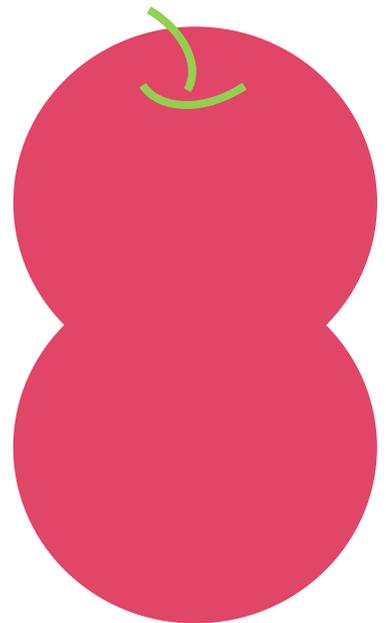
では、触穢の認定はどの時点からはじまるのであろうか。鎌倉初期の法律書『法曹全要抄』は、平安前期の儀式書『新儀式』を引用して、穢物に触れて服忌(忌引)を行う初日を定義している。すなわち、その「穢初」は、穢物を見つけた日またはその「臭香」を嗅いだ日から起算される、と解説している。天下の宗廟・石清水八幡宮の服忌令にもひとしく「臭香」と見え、貴族や寺社の間において、穢を臭気で判別する慣行と法規があった点は明らかだ。鎌倉前期、犬の死穢の場合だが、その始期は発見されたときではなく、それ以前の「臭香」をもって「穢始」と見なす事例がたしかめられる(天福元年<1233>5月9日付け豊受太神宮神主注進状案『大日本古記録』『民経記』7巻157頁)。視覚ではとらえられない「穢気」に触れること、つまり嗅覚による穢臭の認知を触穢のはじまりと規定したのである。鎌倉初期の『古事談』には源信(恵心僧都)の雑務法師が亡くなったとき、「穢に触れざる前に昇き出すべき」とことといった話がある。結局、祈祷によって法師は蘇生するのだが、死を眼前にしても即時に死穢の認定にはならない。触穢の認知には時間差がある点を承知しておく必要がある。鴨長明『発心集』の影響をうけた仏教説話『閑居友』が、源信の『往生要集』「不浄の相」を引いて、不浄のあり様とは「臭く穢らはしき事」と説いた談義や、先の「穢初」の法規など、ひとしく触穢の認定は「穢臭」である。ケガレにたいする嗅覚はもっとも大切な感性であり、認知機能だった。なお、かかる観念を反転させると、死臭をはなつことのない亡骸は奇瑞とされ、往生がかなったとする譚(千々和到「仕草と作法」『日本の社会史』8、岩波書店、1987年、148～53頁)がうまれた訳が判然とする。



書名 『においが心を動かす』
 著者 A・S・バーウィッチ
 発行 河出書房新社 2021.7

★図書館にもあります！

資料番号 0000270804
 請求記号 491.376/ハウ/学関



『出版指標年報』2023年版(全国出版協会出版科学研究所)によると、2022年の書籍新刊の点数は67,000冊、雑誌は約2500タイトルとのこと。これだけの出版点数を見ると、読みたい本も読まなければならない本も、実際にどれほどの本を私たちは読むことができるのか・・・と途方にくれることもしばしばである。さて、図書館員としてはあまた出版される本の中から、図書館に受け入れる本の選定(選書)も大切な業務の一つ、ではどうやって私たちは資料を選んでいるのかというお話。➤

まずは、各出版社が発行している新刊案内のチラシや冊子、例えば大修館書店や医学書院といった資料にざっと目を通す。また主題ごとの出版目録、「部落解放・人権図書目録」などの福祉に関連する主題は要チェック。さらに古い資料の復刻版などを主に出版している六花出版や不二出版など、学習・研究に必要なと思われる資料は、古い資料も当然重要なので、こちらもチェックする。➤



日常的に館員全員で目を通す資料の一つに、図書館流通センター刊行の『週刊新刊全点案内』がある。こちらの冊子は、図書館向けの選書資料として作成されているもの、一般流通する新刊書籍が掲載されている。刊行後3ヶ月以上経過した書籍や、学習参考書・資格試験問題集、書き込みなど個人使用を目的とした書籍などは図書館で購入するには不向きなので掲載されていない。なんと便利！こちらは毎週館員間で回覧され、選書をするという流れである。選書には➤

現在の図書館の蔵書構成やら、学部学科の教育課程の内容やら、昨今の社会の動きなどに考慮し、一冊一冊掲載される本の抄録を読みながら進めるというわけ。丁寧に見ていくと、気がつくと3時間も経っていた！なんてこともあるのです。

その他、岩波書店の『図書』や新潮社の『波』など、書評をメインにした出版社のPR誌も大事な選書ツール。様々な資料を使って色々な情報から本を選んでいく、という図書館の選書のお話、おしまい、おしまい。



第5回

書架とりんごと私 ダイジェスト版

大学のような教育機関に勤めていると、たまに「夏休みとかってヒマでしょ？」と言われることがあるのですが…

全然ヒマじゃないし！
たしかに利用者(学生)はいつもよりは来ませんけど！

となると逆に、“利用者がある時だとできない作業をしよう！”ということになるのです。

今年の夏休みは、表紙にある通り【りんごのたな】の新設に取り組んだのですが…

そこには約8000冊の本を移動させる作業が待っていたのです！！



コイケ

7 なんとか後期の授業開始に間に合いましたね。



子金治

なんか形になったね。



金ちゃん

りんごのたなは、他のWGの担当だったので、広報WGからは子金治さんとコイケさんが関わっていましたね。



ともピ

作業しているところ見ましたけど、大変そうでしたね。



今回はそもそもレファレンスコーナーの改良→りんごのたな新設だからさ。8000冊ってレファレンス資料だからね。

※レファレンス資料…参考図書。辞書、事典、図鑑、書誌、目録など。だいたい大きくて重い。



岩波書店のサイトを見ますと広辞苑が3300gとありますし、平凡社のサイトを見ると、世界大百科事典全34巻は約63kgとあります。



はいはい。どっちも移動させました。



仮に1冊2kgだとしたら、8000冊では…16000kg? えっ!? 16トン??



そんなに!?



その果てに、りんごのたなができたということですね。私は今回はじめて”りんごの棚”というものを知ったのですが。



りんごの棚そのものはスウェーデンの図書館のアイデアなんだ。読書に困難を感じる子ども向けの資料を集めて棚に並べたのが始まり。



日本でも公共図書館を中心に広がりつつあるみたいですね。



うちは大学なので、子ども向けの点字絵本やLLブックの他に、大活字本、読書バリアフリーについて書かれた本も一緒においています。



実際にその資料を利用するというより、「こういう資料があるんだよ」という周知活動に重きを置いている感じになっていますね。

え? 本

一冊一冊の物量があつたってこと? そんなの怖すぎるでしょう。

Webに続く



知ってる？

偉人編

賀川豊彦

「共生」の実現に捧げた人生

毎年10月初旬になると、ノーベル賞受賞者が発表されます。近年では物理学、科学の分野での日本人の受賞が記憶に新しいのではないかと思います。各賞ともそれぞれの分野の最も価値のある世界的賞といっても過言ではありませんが、過去2度の文学賞、3度の平和賞候補になった日本人がいたことをみなさんは知っていますか？

その人は賀川豊彦。明治から昭和期にかけて活躍したキリスト教社会運動家、社会改良家です。賀川の活動は貧民救済運動から始まり、社会福祉事業、児童福祉事業、農民運動、協同組合そして平和運動へと繋がり、その生涯を通し人々の暮らしを支え、人間らしく共に生きるための事業に尽力しました。

賀川の携わった事業は多数ありますが、現在でも私たちの身近にあるのが生活協同組合の運動です。15歳で洗礼を受けクリスチャンとなった賀川は、結核を患い死と隣り合わせの日々の中で信仰に生きる光を見出し、21歳で神戸のスラ

ム街に住み込み伝道と貧困者救済活動に身を投じました。その献身の中で貧困救済には社会構造の変革が必要と感じアメリカに留学、在学中に労働運動に大きな衝撃を受けます。貧しい労働者が安定して生活するためには何が必要かを考えた賀川は、人々が共同して生活を支え守り合う消費者組合の創設を考案します。1921年に神戸購買組合、灘購買組合を創立、指導し組合員への生活必需品の販売以外にも商品開発や日本初の女性組織「家庭会」の活動など、人々の生活向上を目指した支え合いと社会奉仕を続けました。1951年、戦争の悲劇を二度と繰り返さないためにも「協同組合の国際化による世界平和」という考えのもと日本生活協同組合連合会が設立され、賀川が初代会長を務めました。生協の活動は現在も日本全国に様々な分野で私たちの生活に密着し、互いが助け合う活動を展開しています。

賀川が目指した人に寄り添い、尊重する強い想いは2015年に国連で採択されたSDGsの理念である「誰ひとり取り残さない」社会の実現に共通しています。格差社会や貧困、社会的孤立の問題が深刻さを増している現代において、賀川が生涯を捧げ取り組んだ「共生」についてみなさんも今一度考えてみてはいかがでしょうか？

キャリアセンター 斎藤由理香



第109回全国図書館大会が去る11月16日(木)と17日(金)の2日間開催された。この大会は全国の図書館や本、情報などに携わる人たちが一同に会し、今の図書館やこれからの図書館について情報共有をし、もっとよい図書館をつくっていかうとする大会だ。大会1日目は全体会、2日目は公共図書館や大学図書館、著作権・出版流通についてなど細かい分野で分科会が開かれる。今年はコロナ禍でのオンライン開催を経て4年ぶりの対面開催。開催地はお隣の岩手県盛岡市だ。大会テーマは岩手らしく「理想郷“イーハトーブ”で本当の幸せを考える～希望ある未来は図書館とともに～」。

全体会の記念講演は2019年に人類史上初めてブラックホールの姿の撮影に成功した国立天文台水沢 VLBI 観測所の所長である本間^{まれき}希樹氏による「岩手発ブラックホール行き銀河鉄道の旅」。最先端の天文学研究と研究者からみた図書館の重要性をお話し頂いた。天文学が全く分からなくとも、本間先生による分かりやすく興味深いお話で、あっという間の1時間半だった。先生は、一冊の本がその後の歴史を変えることもあるとのこと(日本で言えば『ターヘル・アナトミア』からの『解体新書』など)、図書館や本を通して【予想外の】出会いをして欲しいと語られた。

2日目は「大学図書館」の分科会に参加。オープンサイエンス時代に大学図書館はどう対応するべきかというテーマのお話。オープンサイエンスとは、簡単にいうと今まで主に研究者や専門家が利用していた論文や研究データなどを一般に公開し、利用できるようにすることだが、これは図書館だけでは到底対応できるものではなく、大学全体での対応が必要になってくる。図書館員としてはこの新しい流れを日々勉強する必要性を感じる今日この頃である。

来年の図書館大会はビューンと飛んで九州・長崎での開催。こちらはオンラインと対面で開催予定である。

図書館 菅原裕生

きょうぞう 胸像



誰かしら? シリーズ 1

図書館の隣、国見堂の脇にひっそりと人知れず、いや知られているかもしれないが、七変化をとげている胸像があるのをご存じ？ある時は毛糸の帽子を被り(被せられ)、またある時はマスクを着け(られ)、ときにはハッピーバースディのサングラスをかけ(られ)、はたまたベガルトのユニフォームを着用(着せられ)し、とファッションにはこだわりがあると見えるこの人物は、本学の前身である東北福祉短期大学の学長、そして本学の初代学長を務めた朽木正己師である。

現在の秋田県湯沢市にある永岩寺(「曹洞禅ナビ」で検索可!)に生まれ、大正9(1920)年に第二中学林(本学の前身)を卒業、在学中は柔道選手として活躍し、中学林の黄金期の一時代を作ったという。

師は、梅檀学園長として就任した(昭和30年4月)当初、高等学校だった本校を、短期大学、そして大学へと発展させたのである。師の大学建設に対する理想追及は、「常識を超えた方



法がとられ、荊棘(けいきよく)を踏みしだきつつ、人々を叱咤激励した」と、『梅檀学園壹百年史』には記されている。短期大学時代の「卒業後の賦与資格」を見ると、イ)社会福祉主事、ロ)中学校社会二級普通免許状、ハ)保母資格とあり、現在の大学の原点をここに見ることができる。

さて、朽木師の在任12年の間には、財政的問題や激しい学生運動などがあり、時代に翻弄されつつ、その志は次の大久保道舟学長(『としょかんぼう』NO.29:「History of TFU」参照)へと託されたのである。真っ赤に染まる紅葉の下で何を思うか、朽木先生。

今回の研究余瀝は、現図書館長である鍛代教授に、また「大学の図書館に思う」は、平成28年度から4年間、図書館長を務められた星山幸男教授にご寄稿いただきました。キャリアセンターの斎藤さんにもご寄稿いただき、誠にありがとうございました。星山先生は、今年度で退職されるとのこと、長い間のご指導誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。
(図書館 八巻千穂)



図書館
HP